

## 第4章 安宅氏城館跡の概要

### 第1節 安宅氏城館跡の歴史

#### (1) 安宅<sup>あたぎのしやう</sup>荘について

安宅荘の成立時期については、詳らかでない。文永3年(1266)那智山領である富田・安宅・周参見の三箇村は、後嵯峨上皇の院宣が発給されたが「代々関東成敗」であることから、以前に出していた院宣が召し返されている。鎌倉時代後期に関東成敗地(関東御領)として確認できる一方で、那智山との関わりがあった点も見逃せない。紀伊半島南部は、太平洋海運の要地として、北条得宗家が直轄領として組み込んでいた。安宅荘も他の紀伊半島南部の荘園(周参見荘や富田荘、南部荘など)の例に漏れず、関東成敗地となっていたのである。明確な徴証は見いだせないが、状況的に考えると南部荘などと同様に、鎌倉時代前期までは熊野別当家が支配する所領であったのが(そういった理由もあり那智山が領有を求めたか)、熊野別当家が承久の乱で勢力を落とすなかで、関東成敗地(関東御領)となったのではないだろうか。鎌倉以後の荘園領主などは不明である。なお、管見のかぎり安宅荘の初見例は、天福元年(1233)の「<sup>ためきよげにんならびにでんはくほいけん</sup>為清下人并田畠売券」である〔久木小山家文書55〕。本文書中には安宅荘とともに周参見荘の名もみえる。

『紀伊続風土記』には、安宅荘は安宅川(日置川)が流れるため舟運の便が良く、河口部の日置浦は紀伊山地からもたらされる物資の集積地であり、かつ太平洋航路を行き交う大船が数多く集まる水上交通の結節点として栄えたとある。さらに比較的広い平地があり、安宅荘の北側にある三箇荘との境界に沿って大辺路が通過するなど、陸路の便にも恵まれている。

#### (2) 安宅氏以前

平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけて、熊野水軍(熊野三山を核として結びついていた海の武士勢力)を率いていたのは、熊野三山における現地の最高責任者である熊野<sup>べつとう</sup>別当であった。平安末期頃より院、女院、公家など多くの人々が熊野三山へ参詣した〔小山2000〕。熊野別当は、それらの人々が熊野参詣をする際の宿泊や祭祀、食事などの世話をすることで、京都の貴族・武士などと密接に結びついていった。そのため、その時々の政治情勢に大きく影響を受けることにもなった。

熊野における大きな政治的画期は、12世紀後半の治承・寿永の内乱である。熊野の水軍領主は、自らの利害に基づきつつ行動していた。そういったなかで、熊野別当<sup>たんぞう</sup>湛増は、伊勢・志摩(三重県)方面へ攻め込むなどの行動を繰り返しつつ、熊野の水軍領主を組織化していった。治承・寿永の内乱では、『平家物語』の<sup>とりあわせ</sup>鶏合の逸話に象徴されるように、湛増を中心とした熊野水軍が源氏に味方をし、壇ノ浦(山口県)へ赴くなど最終的には源氏の勝利に貢献した。熊野水軍は、源平合戦の帰趨を決する存在でもあった。

次の大きな画期は熊野が舞台となったわけではないが、熊野別当も従軍した承久の乱(1221)である。この時には、熊野別当(とりわけ湛増の系譜をひく田辺別当)の多くが後鳥羽院方(京方)についたため、乱後には田辺別当の力は大きく削がれることになり、鎌倉幕府の

影響力が強くなり及ぶようになった。ただし、熊野別当家も一枚岩ではなく、武家方について熊野別当家の人物もおり、そういった人物が以後の熊野を運営していくことになった。とりわけ鎌倉時代半ば以降は、院などの熊野詣が減少し、それに伴い熊野別当の力も衰えていった。一方で熊野には、北条得宗家による熊野灘沿岸の支配強化に対する反発もあり、モンゴル襲来に関係して北条氏の関与が強まるなか、14世紀初頭頃には熊野海賊（悪党）の蜂起はピークを迎える。徳治3年（1308）には「西国并熊野浦々海賊」が蜂起し、鎌倉幕府は瀬戸内の水軍領主である河野氏に対して、警固・逮捕の命令を出している。その後も幕府は、敵対勢力である熊野海賊を一掃するために、15か国の軍勢を派遣し、少なくとも8年近く戦乱状態が継続した。

### （3）鎌倉期の安宅氏

安宅氏は、鎌倉時代後期に執権北条氏によって阿波国より派遣された一族と伝わってきた。もともと安宅氏が拠点とした安宅荘（白浜町・日置川下流域）は、関東成敗地として北条氏の影響が強い土地柄であったが、先述のとおり同時期に熊野海賊が紀伊半島沿岸部を中心に幕府に反抗しており、それらを抑える役割を担ったのが安宅氏と考えられている。しかしながら、阿波国より来住という起源については、後世の編さん物である『南紀古士伝』によるものであり、そこに記される来住の時期（応永8年（1401））にも齟齬が認められる。のちの南北朝期における阿波での積極的な活動に由来するかもしれないが確定的ではない。

承久元年（1219）の「南部本庄損得内検帳」には、作人として「阿多木所司」の名がみえる〔『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』〕。阿多木を安宅と積極的に評価すれば、安宅氏の初見例である。南部荘は、承久の乱以前において、熊野別当家が下司職を務めており、熊野水軍の一翼を担ったであろう阿多木所司（安宅氏）が荘官となっていたようである。承久の乱後、後鳥羽上皇方について熊野別当家は南部荘の下司職を追われ、承久3年（1221）佐原家連が地頭となった。それとともに、安宅氏も南部荘での権益を失ったとみられる。その後の安宅氏の動向は不明である。

次に安宅氏が歴史上登場するのは、鎌倉時代末期である。愛多義（安宅）中務と子息弥次郎は、北条氏（普恩寺流）の被官として、六波羅探題北条仲時一行に同行し、番場宿蓮華寺（滋賀県米原市）で自刃する〔兵藤2014〕。このとき、同じく仲時の被官で検断人も務めた紀伊国隅田氏の一族（11名）も自刃している。安宅氏は、鎌倉時代後期に紀伊国守護を務めた普恩寺流の北条氏（仲時父の基時は執権も務めている）と深い関係にあったと推察される。熊野別当家の衰退とともに、関東成敗地となった安宅荘において、その地歩を確保するため普恩寺流北条氏の被官となることを選んだのだろう。

『太平記』で記述される蓮華寺の仲時主従の自害した人物の交名については、蓮華寺に残された「陸波羅南北過去帳」（以下、過去帳という）の記載とほぼ一致することから、この『過去帳』により人名を列挙したと評価されている〔兵藤2014〕。ただし、『過去帳』には建武年間の記載もあることから、自害後すぐに作成されたものではなく、『過去帳』の元となった史料（交名原本）の存在が指摘されている〔高橋2015〕。愛多義中務と子息弥次郎は『過去帳』に記載がなく、『太平記』のみで確認できる人名と指摘されているため〔日置川町史編さん委員会2005〕、交名

原本において記載があった、若しくは『太平記』において付け加えられた一族と想定される。なお『過去帳』によると、蓮華寺で討死・自害した430余名のうち、189名しか記されないことから、姓名が判明すること自体、ある程度の身分の高さを表す。ちなみに、『太平記』の「西源院本」では139名、「神田本」では165名、「玄玖本」では154名と記載の人数にやや異同がある。これは、より古態を示す「西源院本」と後世の増補・改訂を受けた「神田本」、「玄玖本」の違いとみられる〔兵藤2015〕。ただし、どの諸本においても「愛多義」は記されている。

具体的な史料に乏しいことは否めないが、あえて評価するならば鎌倉時代前期の熊野別当家の被官、後期の普恩寺流北条氏の被官といった変遷を経て、安宅氏は日置川河口部に勢力を伸張していったものとみられる。

また、日高川町山間部には、上阿田木神社・下阿田木神社をはじめ、近世期であるが皆瀬村の枝郷として阿田木村が存在した〔『紀伊続風土記』〕。これらが日置川河口部の安宅とどのように関係するのかは今後の課題である。

#### (4) 南北朝期の安宅氏

南北朝期は阿波での活動が顕著となる。観応元年(1350)6月3日には、足利義詮より沼島以下海賊退治を命じられ、水軍領主としての明確な活動が見受けられる。

翌、観応2年(1351)正月7日付けで、足利尊氏により阿波国竹原荘内本郷の地頭職が安堵されている。この時期は、いわゆる観応の擾乱の真っただ中である。この前年、尊氏及び執事の高師直は、九州の足利直冬追討の軍を起し備前国福岡まで出陣していた。しかし、尊氏らは京都を脱出した足利直義が南朝に降伏し、それによる諸勢力の糾合や尊氏一師直方の武将の

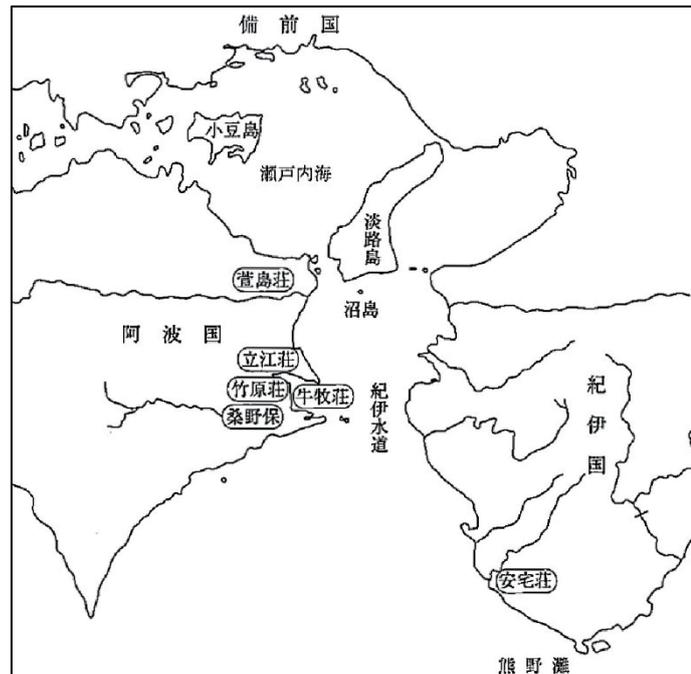


図4-1 安宅氏が領有にかかわった荘保（『日置川町史』より）

寝返りに危機感を覚え帰洛の途についた。先の日付の時点では、まさにその途上、摂津国瀬川宿に在陣していたとみられ〔亀田2017〕、地頭職の安堵により、畿内の後背地である阿波国に所領を有する安宅氏・周参見（須佐美）氏に軍事的な協力を求めたものとみられる。なお、同年2月17日には摂津国打出浜の戦いにおいて尊氏軍は大敗し、師直以下高一族は斬殺され、尊氏と直義は和睦する。

続いて観応2年9月5日付けで、阿波国守護の細川頼春より立江中荘地頭職の替りとして、牛牧荘地頭職（闕所分）が安宅備後権守（頼藤）に預け置かれている。この時期も、尊氏と直義の和睦により一時小康状態であった内乱が再発した時期にあたる〔亀田2017〕。

同じく牛牧荘地頭職については、文和元年（1352）10月13日付け尊氏御教書により、阿波国守護細川頼之から安宅備後権守頼藤に沙汰付けられている。ただし、下文については前年12月3日付けで出されており、そこから10か月以上放置されていることになり、その催促である。下文の時期は直義が尊氏に降伏し、すぐに鎌倉で没する直前であり、うち続く戦乱による混乱した状況で出されたものであったのかもしれない。

最後に文和元年（1352）12月22日付けの足利義詮による<sup>そではんくだしぶみ</sup>袖判下文案により、安宅王杉丸（頼藤の子の近俊か）に萱島荘地頭職を勲功の賞及び桑野保の替りとして宛行われている。萱島荘は石清水八幡宮領（別宮）であり、鎌倉期には紀伊国隅田氏が下司職（萱島西荘）を家伝の職として務めていた〔「隅田家文書」「葛原家文書」〕。このときの地頭職は、南朝方の一宮城主小笠原氏の一族と考えられる一宮六郎次郎成光の跡職となっている。同年5月において、阿波国では南朝方の活動がみられ、義詮より頼之に対して「凶徒退治」が命じられており、この折りの軍功に伴うものとの指摘がある〔日置川町史編さん委員会 2005〕。

これまで安宅氏が関与してきた竹原荘・立江中荘・牛牧荘・桑野保は、すべて那賀川を中心とした阿波国那賀郡内に立地しており、萱島荘地頭職を獲得したことにより、このときはじめて吉野川流域に進出している。しかも、萱島荘は吉野川河口部の重要な港津としての別宮（島）湊を有しており、兵庫津経由での大山崎油座神人による荏胡麻買い付けによる運送の重要な拠点となっていたようだ。15世紀前後の事例であるが、萱島荘の範囲にある大松遺跡（徳島市川内町）の発掘調査から、兵庫津周辺との関わりがある播磨型土鍋が周辺と比して高い割合で出土している〔島田 2019〕。水運拠点としての性格を持つ萱島荘の地頭職を得ていることは、安宅氏の水軍領主としての活動をさらに飛躍させたと考えられる。

なお、『紀伊続風土記』によると、安宅八幡神社は正平年間（1346-1370）安宅河内守が石清水八幡宮より勧請したものと伝わる。石清水八幡宮領である萱島荘の地頭職の獲得が、安宅八幡神社の造営の契機となった可能性がある。また、安宅氏の菩提寺である宝勝寺（白浜町矢田）の文和3年（1354）銘の十一面観音坐像は、院派仏師（院弁）による造像であり、ここでも北朝（足利将軍家）の影響を認めることができる。さらに、同時期の院派仏師による作例が、海蔵寺（白浜町日置）や梵音寺（白浜町大古）といった荘内の他の寺院でも確認され、安宅氏による一連の荘園開発事業に伴うものと評価される〔大河内 2006〕。

このように北朝方として活躍し、阿波国に勢力を扶植するとともに、安宅荘の寺社造営といった所領経営の一端が確認できるが、観応の擾乱後の紀伊国の政治情勢によっては南朝方に属することもあったようだ。正平14年（1359）7月25日付け後村上天皇口宣案で、（安宅）備後権守橋頼藤が備後守に任じられている。また、同年8月3日付け後村上天皇綸旨により、周参見氏とともに阿波国へ発向し、小豆坂（小豆島の誤記か）より南方を切り従えるよう命じられている。この時期の紀伊国での活動はあまり明確ではないが、阿波国へ発向とあることから、本拠は紀伊国安宅荘におき、紀伊水道をまたいで活動したことが明確である。

さらに、正平17年（1362）12月1日付けでは、阿波国の「南方闕所・本所領（天竜寺領と補陀寺領を除く）」が勲功の賞として、頼藤に安堵されている。一貫して南朝方の活動に従事しているようにもみえるが、康安元年（1361）12月3日付けの湯河光種注進状〔「湯河家文書」〕で

は、二代将軍となった義詮を援ける目的で光種が上洛する時に、紀州に留まり忠節を果たした武士のなかに「安宅」「安宅備後権守」「安宅三河権守」の名がみられる。わずか3年余りの間で南朝→幕府（北朝）→南朝と立場を変えたことになる。これらの変遷について水軍領主安宅氏は、自己の権利（紀伊と阿波の所領の維持）を守るために、幕府（北朝）方と南朝方の顔を使い分ける必要があったとされる〔弓倉 2021〕。

南北朝期の安宅氏は、中央の政治状況や南北朝の戦乱と密接に関連しながら、水軍領主として活発に活動していたとみられる。しかしながら南北朝期後半頃になると、史料上明確な活動の徴証はみられなくなる。度重なる紀伊国守護の交代（明徳の乱・応永の乱）による混乱が生じていたのだろうか。

### （5）室町期の安宅氏

寺社の造営や仏像、その他の伝承などからは、南北朝期より安宅荘内での活動が確認できるが、文献史料から紀伊国内での活動が明確になるのは、室町期になってからである。

応永34年（1427）、足利義満側室である北野殿、義満娘の南御所、同じく今御所が熊野参詣をした際の記録が、先達をつとめた法印権大僧都実意により、「熊野詣日記」として南御所に進上されている。その日記中に、「御氷場にて御さか月三献の後御立、此所より山中の御兵士濟々なり、まいらする方々、山本・はしの湯川・あたき・すさみなり、よろいたるもの、そのかすをしらす、」とある〔神道体系編纂会編 1984〕。室町期の熊野参詣は、紀伊路から中辺路、熊野三山へ至るが、大辺路沿い（日置川流域周辺）に勢力を持っていた安宅氏と周参見氏が、石田川（富田川）沿いの一の瀬王子付近までわざわざ出向いているのである。

北野殿参詣の応対は、紀伊国又守護代の藤代氏（口郡か）、同じく中村氏（奥郡か）などのほか、奉公衆の湯河氏、玉置氏や山本氏の名が見える。ここに名が見える武士は、守護関係者（又守護代）や幕府（将軍）直参の奉公衆と位置づけられるが、守護関係者と奉公衆の「御もうけ」は重ならず、儲（饗応）の場にはそれぞれの排他的な領域支配が垣間見える〔矢田 1998〕。

一方、安宅氏や周参見氏は、奉公衆としての活動を確認することはできず、それぞれの本拠地から離れてはいるが、湯河氏との関連で儲（饗応）の場に参じたとみられる〔弓倉 2021〕。少なくとも紀伊国内（主に奥郡）で大きな勢力を持っていた湯河・玉置・山本氏らの奉公衆に匹敵する実力を備えた武士であったと位置付けられる。ちなみに、和泉国の守護代官（守護代ではない）の名は、北野殿一行の宿の応対を務めたにもかかわらず「なにかし」（某）としか記されていない。南北朝期の幕府方（北朝方）との密接な連携に起因し、安宅氏や周参見氏が将軍家周辺で把握（認識）されていたとみられる。

南北朝期から室町期前半の来歴より、安宅氏と周参見氏を幕府直属の国人とする評価もある。この場合、久木小山氏ははやくから守護との繋がりが強く、幕府による軍事動員が行われていない享徳3年（1454）の畠山氏家督紛争時に畠山義就より出陣要請を受けていることから、守護被官の国人とされる。さらに、北野殿参詣の応対には名を連ねていない〔弓倉 2021〕。

ちなみに、この時期（享徳～文明期の畠山氏の内訌）の久木小山氏は、正守護となった方の動員に従っているが、安宅氏や周参見氏の動向は不明である。

(6) 戦国期の安宅氏

戦国期の安宅氏は、明応の政変後に紀伊国の在国守護となった畠山尚順との関わりのなかで、その活動がみられる。義就流の基家、義英と政長流の尚順（尚慶・ト山）、植長が争いを続けているなか、安宅氏は政長流畠山氏派として活動している。明応6年（1497）～永正5年（1508）に比定される文書中には、「安宅南要害」（勝山城か）防衛の命令が、尚順から久木小山氏へ出されている〔久木小山家文書137〕。また、同じく尚順より久木小山氏が「安宅大炊助」と申し合わせて、忠節を果たすように求められている〔久木小山家文書137〕。一方で、安宅氏被官とみられる田井氏（田井筑後守）は、永正4年（1507）畠山義英から藤並荘宮所分（有田川町）と幾間・堅田内誉田肥前分（上富田町・白浜町）を宛行われており、義就流畠山氏とも繋がりがあった（ただし、尚順と義英が一時的に和議をしていた時期にあたる）〔久木小山家文書15〕。

田井氏は、天文年間には安宅氏の被官となっていたようであるが、文亀2年（1502）には久木小山氏と弓矢契約を結ぶなど独自の行動がみられる〔「安宅家文書」10〕。誉田肥前という人物を史料上認めることはできないが、義就流畠山氏の内衆誉田氏の一族とみられる。誉田氏は、嘉吉元年（1441）～文安4年（1447）には紀伊国口郡守護代を務めており、このころに紀伊国内に権益を持っていたと考えられる。と

はいえ本拠としては河内国誉田であり、これ以後の紀伊国での活動は不明である。この誉田氏の有力な内衆に田井氏の名が挙がる〔小谷1999〕。むろん河内の田井氏と熊野の田井氏を即座に直結させることはできないが、義英が田井氏に誉田肥前分の領地を与えようとしていることの影響を探る手がかりとなるだろう。

また、明応4年（1495）流浪中であった前将軍足利義植（及び畠山尚順）方の畠山政近（奉公衆）が、越中の義植と紀伊の尚順との連携のため、息子千夜叉を「紀州中山城」に在陣させている。この「紀州中山城」は、安宅氏城館跡の中山城跡に比定されるが、義就流の基家が紀伊に進軍し、それに呼応した山本氏・愛洲氏との戦いに関連するものとみられている〔川口2020〕。

このような明応の政変以後の15世紀末～16世紀初頭段階の富田川・日置川流域の軍事的な緊張関係〔坂本2020・2021〕は、安宅氏城館跡の築城・維持に深く寄与したものと考えられる。また、幕府直属の国人とされる安宅氏は、尚順が在国守護となった段階から畠山氏との関わりが顕著となる〔弓倉2021〕。

永正17年（1520）～大永5年（1525）に比定される史料では、安宅氏は久木小山氏や泰地氏とともに、畠山植長（尚順の子）から動員の命令を受け、山本氏の居城・龍松山城（弘撰寺城）に援軍に出向いている〔「久木小山家文書」145-147〕。明応年間には敵対していた山本氏も、この時点では同じ陣営に属している。この時期の敵対勢力については判然としないが、紀伊国を放逐された尚順や義就流畠山氏の勢力だろうか。永正17年体制〔弓倉2006〕後の紀伊国の情勢は、

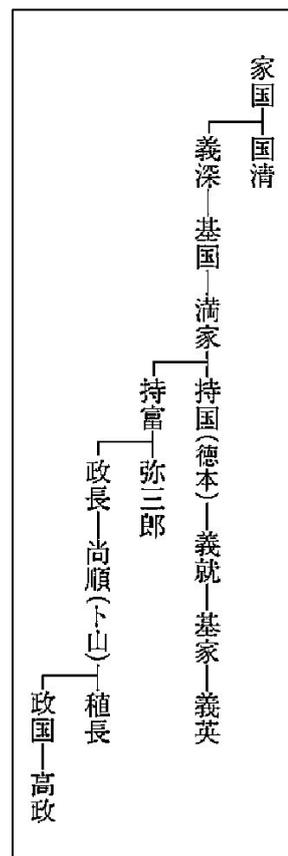


図4-2 畠山氏略系図  
〔『日置川町史』より〕

植長のもとに国人勢力が集約していき、熊野での争乱の記録は認められなくなるが、奉公衆や他の国人勢力（龍神氏など）にみられるような天文年間以降の畿内への出兵や動員を示す史料は、安宅氏と久木小山氏ともに残らない。

このように熊野における局地的な争いのようにみえる安宅氏に関連する戦乱も、守護畠山氏のみならず、明応の政変以後の將軍家の争いとも繋がるものと評価できる。

戦乱の状況だけでなく、大永年間、安宅氏の所領における寺社仏閣の整備が再び隆盛する時期でもある。大永3年（1523）の出月宮（白浜町日置）の再興をはじめ、日置川流域の寺社仏閣の整備を示す棟札が集中する。戦乱後の一時的な平穏時における整備と理解できるが、明応の南海トラフ地震からの復旧との関連も視野に入れておきたい〔瀬谷 2016〕。

天正5年（1577）7月8日付「安宅光定起請文（牛玉宝印）」で安宅氏は、周辺の領主層である久木小山氏、周参見氏、温井氏と起請文を交わしている〔「久木小山家文書」74〕。同年2月から3月にかけて織田信長による紀州征伐後、再び争乱の兆しがみえつつある状況のなか交わされた起請文である。熊野の領主層にどのような影響を与えていたかは明確ではないが、畿内一紀伊北部の情勢と熊野が無関係であったとはいえない。天正13年（1585）の豊臣秀吉の紀州征伐においては、最後まで抵抗した湯河氏や山本氏と異なり、前段の起請文に則し行動をともにしたであろう安宅氏・久木小山氏・周参見氏は秀吉に帰順し、所領を安堵されている（温井氏の動向は不明）。

そのほか戦国時代後期には、淡路の安宅氏や後北条氏に属した安宅紀伊守が水軍領主として活躍している〔永原 1997〕。これらの安宅氏が、熊野の安宅氏と直接的に関連するかは史料上ははっきりしない。しかしながら、熊野安宅氏の南北朝期における淡路国沼島での活動が、淡路安宅氏の由緒につながる点や、後北条氏の旗下で梶原氏・愛洲氏といった他の紀伊国の水軍領主と行動をともにしている点を踏まえれば、熊野の安宅氏から分かれた一族といえるかもしれない。

最後に安宅氏の被官層に触れたい。いくつかの棟札により判明しているものから復元する。永正14年（1517）生馬荘の山王権現（日吉神社）棟札から、このときの領主安宅大炊之助による三の宮修繕の代官、作事奉行、庄官の名がわかる〔『紀伊続風土記』、上富田町教育委員会 2021〕。代官は、中嶋惣次郎（それに続いて、的場源兵衛吉次、中嶋若女）と記され、このうち中嶋姓については、安宅八幡神社の大永4年（1524）棟札で、本願安宅氏に次ぐ位置に記される。さらに、出月宮の大永3年（1523）棟札写で「へきのなかじま（日置の中嶋）」と記載される一族とみられる。作事奉行は、小谷与三衛門俊久、井谷次郎衛門尉の名が記される。「久木小山家文書」中の安居に関わる土地の売買文書に小谷姓が散見されることから、小谷与三衛門俊久は、安居に拠点をもつ一族と想定される。庄官は、那目良新九郎と記されている。那目良は、上富田町の地名であり、安宅氏の被官ではなく、生馬荘に属する荘官層であろう。このほか、田野井五社大明神の天文15年（1546）棟札には、安宅直重が本願となり、安宅重俊、田井氏俊も願主に加わっている。この時点で、田井氏は完全に安宅氏被官となっていたようだ。このように、安宅氏の支配領域とみなされる日置、田野井、安居を拠点とする一族を被官とする安宅氏の被官層の在り方の一端を示している。

### (7) 豊臣政権下の安宅氏

文禄・慶長の役においては、藤堂高虎のもと熊野衆の一員として水軍〔紀伊国警固船〕〔紀伊国船手〕を率い参陣している。その折りに高麗こもかい城に城米を預け置いたことを、周参見、安宅、三ヶ小山（久木小山）、高川原、小山（西向小山）、玉置の連名で、高虎あてに報告している〔久木小山家文書〕104。豊臣政権下においても水軍領主としての活動が期待されていたようだ。

軍事的活動以外にも、安宅氏と久木小山氏は、大坂城の普請に必要な材木運搬を秀吉の奉行衆である山中山城守より命じられている〔久木小山家文書〕33。安宅氏は、日置川中流域の久木小山氏と共同で日置川流域の山林資源を主体的に管理・運用していたことがわかる。ただし、秀吉の奉行人からの再三の催促に対し、材木の抑留をしていたこともあり、豊臣政権に服従したとはいえ、容易に従わない存在でもあったようだ。また、安宅氏の領域の山（田野井山、安居山）で鹿が少なかった時には、久木小山氏の山（三ヶ川山）を借りて、鹿狩りをすることもあった。戦場に赴くだけでなく、地域社会における在地領主として、所領支配（経営）していた姿が垣間見られる。豊臣家滅亡時における安宅氏の動向は、二次史料からしか追えないが、豊臣側としての立場であったとみられる。

なお、石田三成の家臣として、主に島津氏や相良氏との交渉の任を務めた安宅三河守秀安の名が挙げられる〔中野 2017・谷 2018〕。淡路安宅氏（安宅冬康の子か）に連なる人物と目されるが〔天野 2021〕、『紀伊続風土記』において安宅左近丞春定が石田三成に与していたとの記述と一致する。ただし繰り返しになるが、熊野（日置川）の安宅氏との関係は今後の検討課題となる。

### (8) 近世期の安宅氏

近世期にいたると、武家としての命脈は保たれないが、紀州藩では地士としての身分を有し、地域における有力者の地位を占めていたようである。ただし、安宅氏居館跡は17世紀初頭頃に廃絶したと推定され、その後は居館跡の範囲外（堀のすぐ南側）に居住していた。この近世期の安宅氏屋敷地跡が、中世における居館跡の伝承地と変化していく。

このような地域伝承と密接に関連して、『安宅一乱記』は生み出されたものだと考えられる。『安宅一乱記』は、安宅氏や安宅氏城館跡を世に広める一助となったものだが、その評価は研究者によって様々である。最新の検討によると、その成立時期は、文中の「富樫左衛門のあたかの関」の表現より貞享2年（1685）を遡ることはなく、さらに歌舞伎十八番『勸進帳』の影響を加味すれば、天保11年（1840）以降に引き下げられる。また、現存する写本には、貸本屋の注意書に類する明治39年（1906）の注記があり、写本が貸出されていた可能性が指摘されることから軍記物語（後期軍記）よりも、近世文芸の読本や実録との関係を指摘されている〔田口 2020〕。

地域における近世期の文芸活動を評価する場合、貴重な資料となる『安宅一乱記』は中世の同時代史料としての価値は見いだせないとしても、地域の歴史を語る上で重要な視点を与えてくれるものであることは間違いないだろう。

## 第2節 安宅荘と周辺領主の関係

安宅氏城館跡が位置する紀伊半島南部は、列島の東西を結ぶ海上交通の結節点であり、そこでは水軍を率い交易や軍事に携わる複数の領主が存在していた（図 4-3 参照）。その中でも安宅氏は、複雑な政治状況に呼応するように周辺領主と協同や敵対を繰り返し行っていたことが豊富な史料よりうかがい知ることができる。安宅氏と周辺領主との位置関係を図 4-4、安宅氏と周辺領主の動向（協同・敵対の様子）を表 4-1 に示す。

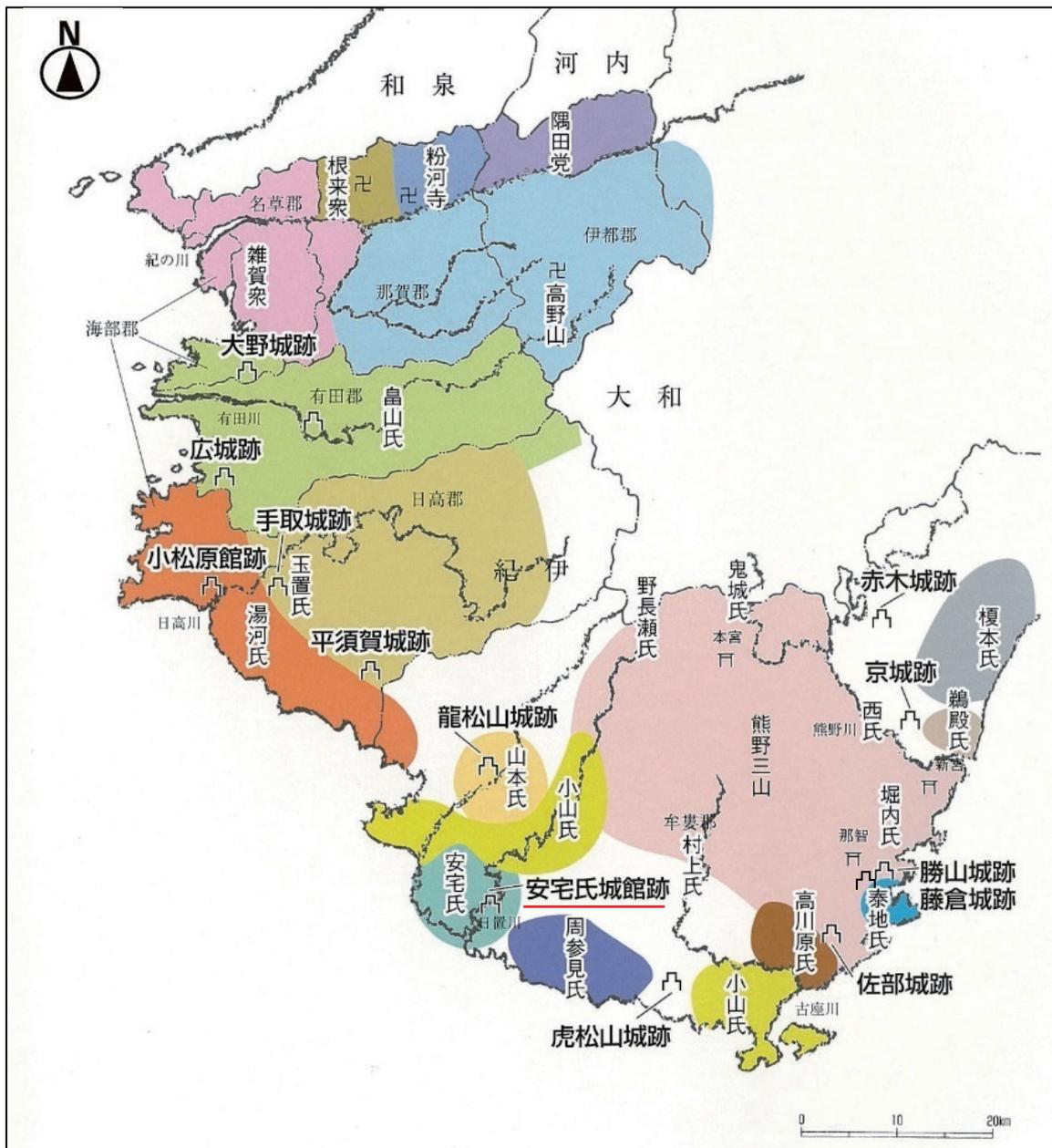


図 4-3 戦国時代の勢力配置（15 世紀後半～16 世紀頃）  
 (『特別展 戦乱のなかの熊野ー紀南の武士と城館ー』より一部追記)



表 4-1 安宅氏と周辺領主の動向

年代	主な出来事	安宅氏と周辺領主の動向			
院政期	熊野詣が盛んになり、白河、鳥羽、後白河、後鳥羽上皇らは院政四代に渡り、約 100 年間に 100 回近い「熊野御幸」を行う。				
12 世紀後半	治承・寿永の内乱が起こる。				
承久元年 (1219)		<p><b>安宅?</b></p> <p>南部庄の作人として、阿多木所司がみられる。この時期の下司は、熊野別当家が務めている。〔南部本庄損得内検帳〕</p>			
承久 3 年 (1221)	承久の乱が起こる。				
天福元年 (1233)		<p><b>安宅</b> <b>周参見</b></p> <p>「為清下人并田島売券」に安宅荘と周参見荘の名が記載されている。〔久木小山家文書「為清下人并田島売券」〕</p>			
文永 3 年 (1266)		<p><b>安宅</b> <b>山本</b> <b>周参見</b></p> <p>後嵯峨上皇が院宣を発して、那智山領富田・安宅・周参見三箇村について配給した院宣を、関東成敗地（関東御領）であることを理由に撤回する。〔中村直勝氏所蔵文書「後嵯峨上皇院宣」〕</p>			
正安 2 年頃 (1300 頃)	熊野海賊の蜂起がピークを迎える。				
徳治 3 年 (1308)	西国および熊野浦々海賊が蜂起する。鎌倉幕府が瀬戸内の水軍領主である河野氏に対して、悪党の警備・逮捕の命令を出す。〔関東御教書「尊経閣所蔵古蹟文徴」〕	<p><b>安宅</b> <b>久木小山</b></p> <p>安宅彦次郎俊正が、小山石見守経幸と安居竹之和田大明神之前武段の島と白糸御具足とで相博（交換）を行う。〔久木小山家文書「安宅俊正相博状」〕</p>			
元弘 3 年 (1333)	六波羅探題が滅び、北条仲時が近江国番場宿で自害する。鎌倉幕府が滅亡する。	<p><b>安宅</b></p> <p>北条仲時に殉じて、愛多義中務丞、子息弥次郎が自害する。〔兵藤 2014：岩波書店『太平記（二）』〕</p>			
建武 3 年 (1336)	足利尊氏、建武式目を制定。後醍醐天皇、吉野に移る。（南北朝の分裂）	<p>南北朝の分裂</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%; border: none; text-align: center;"> <p>&lt;北朝&gt; (足利尊氏・義詮)</p> </td> <td style="width: 50%; border: none; text-align: center;"> <p>&lt;南朝&gt; (後醍醐天皇)</p> </td> </tr> </table>		<p>&lt;北朝&gt; (足利尊氏・義詮)</p>	<p>&lt;南朝&gt; (後醍醐天皇)</p>
<p>&lt;北朝&gt; (足利尊氏・義詮)</p>	<p>&lt;南朝&gt; (後醍醐天皇)</p>				
建武 4 年 (1337)		<p><b>西向小山</b> <b>山本</b></p> <p>田辺総領法印の城を攻める。〔西向小山家文書「熊野山上綱小山三郎実隆軍忠状」〕</p>			
建武 5 年 (1338)	足利尊氏、征夷大將軍になる。				
暦応 5 年 (1342)	長寿寺境内出土の備前焼大甕が制作される。				

年代	主な出来事	安宅氏と周辺領主の動向	
		<北朝>	<南朝>
正平年間 (1346-1370)	安宅八幡神社が石清水八幡宮より勧請される。 〔『紀伊続風土記』〕		
観応元年 (1350)		<b>安宅</b> 足利尊氏の嫡男義詮により、安宅氏が淡路国沼島 の海賊退治を命じられる。 〔安宅家文書「足利義詮御判御教書」〕	
観応2年 (1351)		<b>安宅</b> <b>周参見</b> 室町幕府が、安宅・周参見氏に阿波国竹原荘内本郷地頭職を安堵する。〔安宅家文書「室町將軍足利尊氏御教書」〕	
		<b>安宅</b> 阿波国守護である細川頼春、立江中荘地頭職に替えて、牛牧荘地頭を安宅頼藤に預け置く。〔安宅家文書「細川頼春預ヶ状」〕	
文和元年 (1352)		<b>安宅</b> 足利義詮が、安宅王杉丸に桑野保と替えて、萱島荘地頭職を宛行う。 〔安宅家文書「足利義詮(カ)袖判下文」〕	
文和3年 (1354)		<b>安宅</b> 安宅氏の菩提寺である宝勝寺銘の十一面観音坐像が院派仏師(院弁)による造像が行われる。	
正平14年 (1359)			<b>安宅</b> 南朝方より、安宅頼藤が備後守に任じられる。このとき、頼藤は橘氏を称する。 〔安宅家文書「後村上天皇口宣案(宿紙)」〕
正平14年 (1359)			<b>安宅</b> <b>周参見</b> 南朝方より、周参見氏と協力して、阿波国へ発向することを命ぜられる。 〔安宅家文書「後村上天皇諭旨」〕

年代	主な出来事	安宅氏と周辺領主の動向	
		<北朝>	<南朝>
康安元年 (1361)		<b>安宅</b> 湯河光種の上洛時の注進状により、紀伊国の在国し忠節を果たした武士の中に、安宅氏の名がみえる。〔湯河家文書「湯河光種注進状」〕	
正平17年 (1362)			<b>安宅</b> 南朝方が、阿波国南方の關所並びに本所領を、勲功の賞として、安宅氏に宛行う。〔安宅家文書「源某宛行状」〕
明德3年 (1392)	紀伊国守護に大内義弘が就任する。	南北朝の統一	
応永6年 (1399)	足利義満が、大内義弘を討つ。(応永の乱) 紀伊国守護に畠山基国が就任する。	<b>久木小山</b> 紀伊国守護大内義弘が小山八郎に印南本郷地頭職を宛行う。〔久木小山家文書「大内義弘宛行状」〕	
応永8年 (1401)		<b>安宅</b> 阿波から頼春(安宅氏)が安宅荘(日置川下流域)に来住・定着されたとされる。阿波からやってきた「安宅氏」(頼春一族)が旧来の領主「原安宅氏」にとって変わり、安宅荘を支配するようになった経緯が記されている。〔「南紀古土伝」〕	
		<b>安宅</b> <b>久木小山</b> 高川原氏や小山氏とともに、「安宅氏(頼春の遺児)」により「原安宅氏」への仇討ちがされる。〔「南紀古土伝」〕	
応永25年 (1418)	熊野本宮と守護畠山氏が田辺をめぐる争う。		
応永34年 (1427)		<b>安宅</b> <b>周参見</b> <b>山本</b> 北野殿の熊野参詣の折に、山本氏、湯河氏、周参見氏とともに安宅氏が道中で世話をする。〔「熊野詣日記」〕	
永享10年 (1438)	永享の乱が起こり、鎌倉公方足利持氏が自害する。	<b>久木小山</b> 小山九郎(家次)が、多武峰 <sup>とうの</sup> を攻略する際に、紀伊国守護畠山持国の軍に属する。〔久木小山家文書「畠山持国感状」〕	
文安5年 (1448)	畠山家の跡目が、持国の弟持富から、持国の実子の義就に改められる。		
宝徳元年 (1449)		<b>久木小山</b> 南山衆の蜂起に際し、小山氏が守護方として出陣する。〔久木小山家文書「畠山徳本(持国)感状」〕	

年代	主な出来事	安宅氏と周辺領主の動向	
		畠山氏の内訌	
		<畠山政長-尚順-植長派>	<畠山義就-義英派>
享徳3年 (1454)	畠山義就と対立する勢力が、持富の子弥三郎を擁立し、その後両派の激しい抗争が展開される。(畠山氏の内訌)		<b>久木小山</b> 義就派が切目に軍勢を進め、小山氏が感状を与えられる。[久木小山家文書「畠山義夏(義就)書状(折紙)」] 木堂での合戦に出陣し、感状を与えられる。[久木小山家文書「畠山義就感状(折紙)」]
応仁元年～ 文明9年 (1467～ 1477)	細川勝元・畠山政長ら(東軍)と山名宗全・畠山義就(西軍)、京都で戦う。(応仁・文明の乱)		
文明8年 (1476)	畠山弥三郎亡き後、弥三郎の弟である政長が、竜口城、三栖・衣笠・秋津口・目吉良城で義就派と戦う。	<b>久木小山</b> 竜口城、三栖・衣笠・秋津口・目吉良城の戦いに味方し、続く衣笠・知法寺両城での戦いでも政長派として出陣する。[久木小山家文書「長則書状(折紙)、神保長誠書状(折紙)」]	
明応2年 (1493)	明応の政変がおこる。畠山政長が自害する。政長の嫡男尚順は紀伊に逃れる。		
明応4年 (1495)頃か		<b>安宅</b> 奉公衆畠山政近の子である千夜叉が中山城に在陣する。[足利義植御内書写「座右抄巻4」]	
明応6年 (1497)～ 永正5年 (1508)	畠山氏による湯河退治が行われる。	<b>安宅</b> <b>久木小山</b> 畠山尚慶、小山氏に(安宅氏のこもる)安宅南要害(勝山城か)への援軍を申し付ける。[久木小山家文書「畠山尚慶(尚順)書状(切紙)」]	
永正元年 (1504)		畠山尚順と義英の間に和議が結ばれる。	
永正4年 (1507)		<b>田井(安宅?)</b> 3月: 畠山義英より誉田肥前分(幾間・堅田荘)が田井筑後守に宛行われる。(田井氏は天文年間頃には、安宅氏被官となる)[久木小山家文書「畠山義英奉行人盛秀・康綱連署奉書写」]	
		12月: 畠山尚順と義英の間に和議が決裂する	

年代	主な出来事	安宅氏と周辺領主の動向	
永正 17 年 (1520)	畠山尚順が内衆や国人と対立し、紀伊を追放され、淡路へと去る。 その後ただちに、尚順を追放した湯河氏・野辺氏らと、尚順の嫡男植長との間に和睦が成立する。	< 畠山政長-尚順-植長派 >	< 畠山義就-義英派 >
永正 17 年～ 大永 5 年 (1520-1525)		安宅 久木小山 畠山植長の命により、安宅大炊助が、小山氏とともに、一ノ瀬の山本氏の合力に向かう。〔久木小山家文書「畠山植長奉行人丹下盛賢・遊佐長清連署状」他〕	
天正 5 年 (1577)		安宅 久木小山 周参見 安宅氏が久木小山氏、周参見氏、温井氏と起請文を交わす。〔久木小山家文書「安宅光定起請文」〕	
天正 13 年 (1585)	羽柴秀吉による紀州攻めが行われる。	安宅 久木小山 周参見 羽柴秀吉に帰順する。〔『紀伊続風土記』〕 山本 秀吉に攻め破られ、所領を没収される。〔『多聞院日記』〕	
天正 14 年頃 (1586)		安宅 久木小山 秀吉による大坂城の普請に久木小山氏とともに関与する。〔久木小山家文書「山中長俊書状(折紙)」〕	
		安宅 久木小山 安宅氏の山で鹿が少なかったときは、久木小山氏に頼み、久木小山氏の山(三ヶ川山)を借りて、鹿狩を行う。〔久木小山家文書「安宅重治書状」、神宮寺小山家文書「安宅重治書状」〕	
寛政 20 年 (1643)		安宅 「大崎御番所改帳」に日置廻船が記録されており「あたぎへき村(安宅平喜村)」の船が大坂へ材木を輸送中という記録が残っている。〔『日置川町史』〕	

### 第3節 各城館跡について

#### (1) 安宅氏居館跡

##### 1) 立地

『安宅一乱記』において、「安宅本城」と記される安宅氏の本拠であり、日置川と安宅川に挟まれた三角状を呈する微高地に所在する。現在では宅地化が著しいが、小字「城ノ内」という名称が残っている。また、安宅氏居館跡の南側に位置する旧河川の合流地点が、中世期の湊の伝承地となっている。



写真 4-1 安宅氏居館跡 遠景

##### 2) 縄張りの特徴

平成 14 年度（2002）に実施した発掘調査では、居館を取り囲む幅約 17m、深さ約 2m 以上の 12 世紀から 17 世紀初頭の堀跡が検出された。この堀跡は、平成 29 年度（2017）に実施した地下レーダ探査により、対応する南側でも確認された。これらの成果を踏まえ居館跡の範囲は、南北約 120m、東西約 100m の範囲の可能性が高いことが明らかになった。

##### 3) 調査成果

調査により、近世初頭に埋没する幅 5m 以上の堀跡、礎石、素掘りや石組の井戸が検出されている。出土遺物には、東海地域からの搬入品である山茶碗・瀬戸美濃系陶器・南伊勢系土師器（鍋）、畿内や瀬戸内地域からの搬入品である瓦器・播磨型土鍋・備前焼に加え、白磁や青磁、青花などの中国陶磁や朝鮮陶磁など様々な地域のものがある。これは日置川河口部が、太平洋海運において重要な役割を果たしていたことを示すとともに、安宅氏が河口部付近の微高地にあえて居館を構えたのは、水運を重視したためと考えられる。

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 14 年 (2002)	日置川町 教育委員会 (公益財団法人 和歌山県文化財 センター)	試掘確認調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>中世遺構面を二面確認。</li> <li>室町期と考えられる溝・土坑・基礎石・柱穴など多くの遺構を検出し、多量の遺物が出土。</li> <li>北西方向の幅約 17m、深さ約 2m 以上の大溝が延長約 20m 以上で検出。</li> </ul>
平成 21 年 (2009)			<ul style="list-style-type: none"> <li>16 世紀初頭の柱穴列を検出。</li> </ul>
平成 24 年 (2012)			<ul style="list-style-type: none"> <li>溝を検出。</li> </ul>
平成 29 年 (2017)	白浜町 教育委員会	地下レーダ探査	<ul style="list-style-type: none"> <li>居館跡の南限を画する堀跡の確認。</li> <li>居館跡想定範囲内外の遺構の分布の粗密の確認。</li> </ul>
平成 30 年 (2018)		試掘確認調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>居館内部の区画溝（幅約 5m）を検出。</li> <li>井戸 1、2 の検出。</li> </ul>

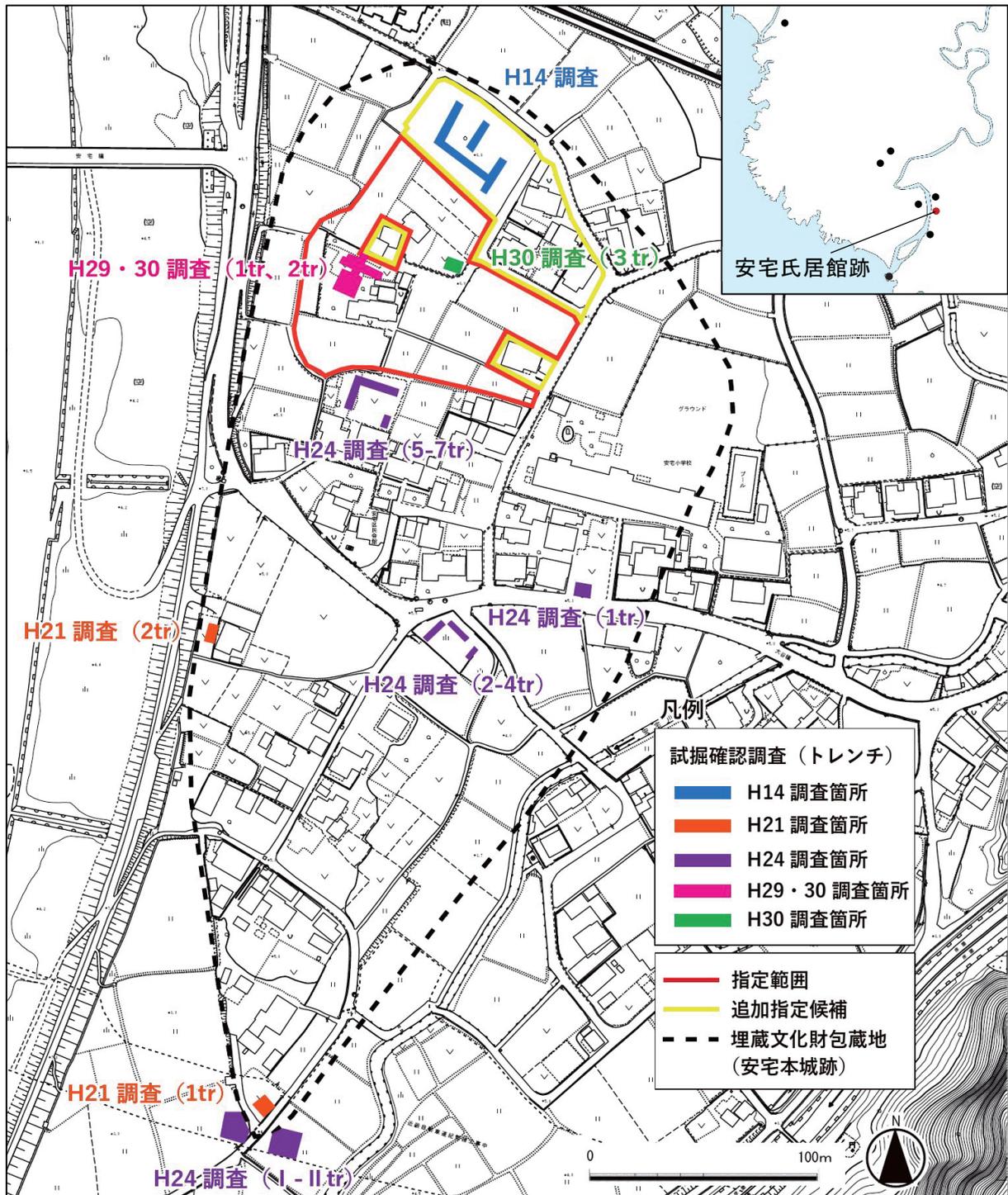


図4-5 安宅氏居館跡 指定範囲と試掘確認調査位置

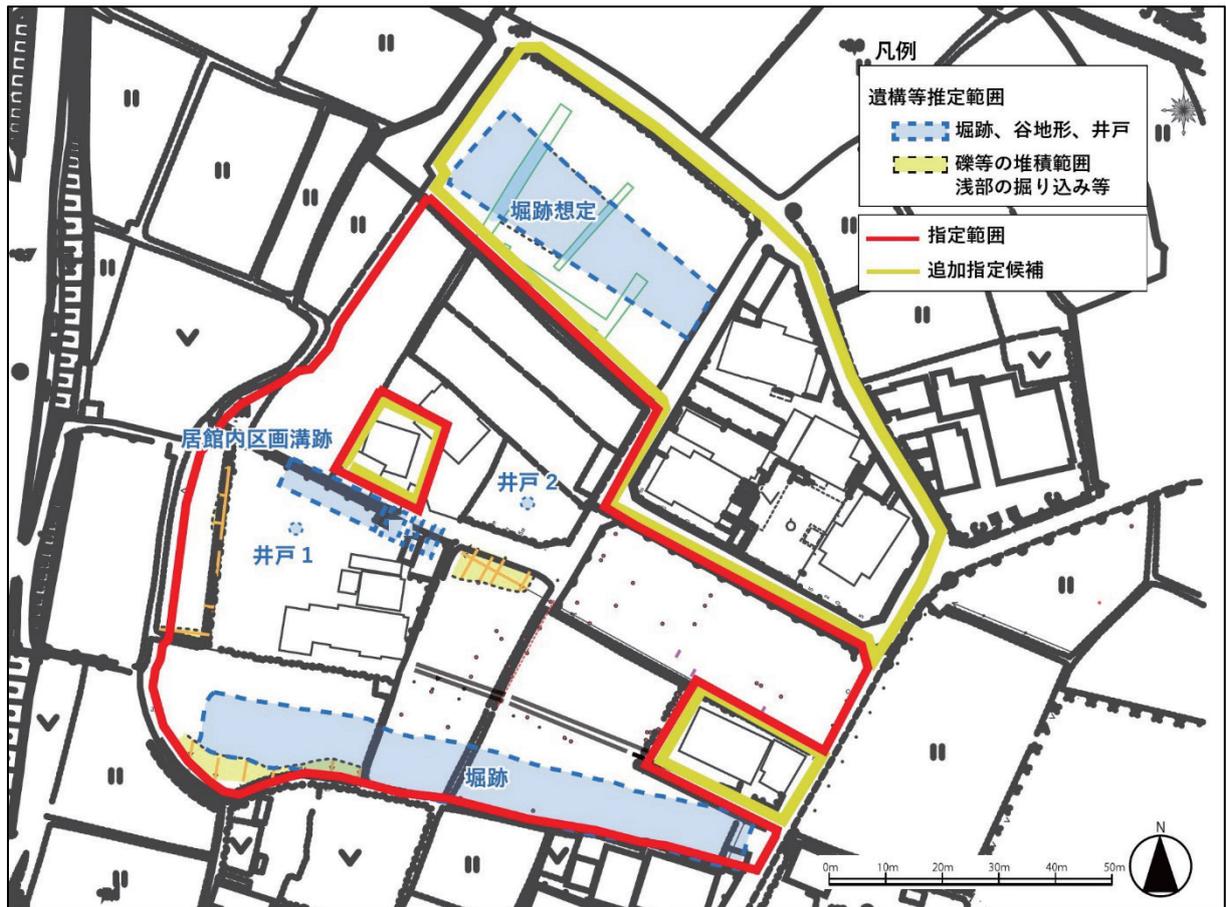


図 4-6 安宅氏居館跡 調査成果図



写真 4-2 H30 調査全景



写真 4-3 井戸 2 (H30 調査)



写真 4-4 南伊勢系土師器 (H30 調査)



写真 4-5 鉛製鉄砲玉 (H29, H30 調査)